

派遣者番号	R6K16	氏名	新田 敦彦
研究主題 —副主題—	見通し活動は学習にどのような影響を与えるのか —一人1台端末を活用した中学校社会科の複線型授業を通して—		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	川合 一紀
所属	足立区立第九中学校	所属長	佐藤 豊

キーワード：自己調整学習、複線型、自由進度学習、見通し活動、社会科

要旨：本研究では、中学校第2学年の社会科で複線型授業を行い、見通し精度の向上が自己調整スキルの向上につながることを明らかにした。また、見通し精度が向上した生徒の学習特性を分析することで、見通し精度を向上させる指導の在り方について検討した。学習計画表の記述および質問紙調査の結果を分析した結果、以下の4点が明らかになった。①授業回数を重ねるにつれて、生徒の見通し精度は向上し、特に単元序盤における課題内容の把握が見通し精度の向上に大きく影響する。②見通し活動を通して、生徒の自己調整スキルが全体的に向上する。③見通し精度が高い生徒ほど、自己調整スキルも高い傾向が見られる。④個別学習を指向し、学習序盤に課題内容の全体像を掴む傾向がある。本研究の結果は、複線型授業において、見通し活動の精度を向上させる指導は、生徒の自己調整スキル向上に有効であり、特に学習序盤における介入が大きく影響することを示唆している。

見通し活動は学習にどのような影響を与えるのか。 —一人1台端末を活用した中学校社会科の複線型授業を通して—

新田敦彦

1. 研究の背景と目的

中央教育審議会（2021）は「令和の日本型学校教育」の構築を目指して全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現を掲げている。しかし、従来の教員主導の授業形態から脱却できない教員は多い。高橋（2022）は、一人1台端末を活用し、高次の資質・能力の育成のための授業づくりに対して、複線型の授業を提案している。このような教育方法において想定されているのは、他者による指示や働きかけによって学ぶのではなく、自ら学習のプロセスを進めていく自律的な学習者像である。すなわち、学習の在り方として、自己調整学習を一つの目標として設定しているといえる（岡田，2022）。

自己調整学習とは、学習者が見通しを立て、学習したことを振り返り、調整しながら学ぶ学習である。自己調整学習のプロセスは、予見、遂行、自己内省の段階であり、これを自己調整サイクルとした（B. J. ジーマン、D. H. シャンク，2006）。

本研究では、学習活動の中心となる遂行段階に近接する予見段階に着目する。伊藤・大島（2024）は学級全体に共有された本時の目標から自らの課題を見つけ、その課題を解決するために最適な学習方法や時間配分を考え選択し、学習計画を立てる活動を見通し活動と定義した。木村（2023）は、学習者が課題・目標を基に、どのような方法・方略で学習活動を進めるのか明らかにし、それらの学習にどのくらいの時間取り組むかの時間配分を行うことによって、自己調整力が向上すると述べている。同時に、学習者が1時間の計画を立案できるようにするには、複数回の経験が必要であり、段階的な指導が必要としている。

一方で、見通しに関する先行研究では、学習者が自ら立てた目標や学習計画が遂行段階にどのように影響したのか、段階的な指導の具体的な方法までは明らかにされていない。

本研究では、学習目標達成に向けた学習活動において、自己に最適な学習内容、学習方法、学習時間などを事前に予測し、その予測が実際の学習成果とどの程度一致するかを見通し精度と定義する。見通し精度は、自己調整スキルの重要な構成要素の一つであり、高い見通し精度は、効果的な自己調整学習を可能にすると考える。

本研究では、複線型授業という文脈において、見通し精度が自己調整スキルの向上につながることを明らかにする。その上で、見通し精度が向上した生徒の学習特性を記述分析により明らかにし、見通し活動への教員の指導方法を検討することを目的とする。

2. 研究の方法

2.1. 対象

本研究の対象は、公立中学校に通う2学年5学級全172名である。社会科地理的分野「日本の地域的特色」の単元（9時間）を取り扱う。第2時から第7時にかけては、複線型の自由進度学習を設定した。対象となる単元では、木村・黒上（2022）が開発したレギュレイトフォームを参考に、見通し活動に力点をおいて修正した学習計画表を用いた。

2.2. 調査方法

（1）学習計画表の記述分析により、見通し活動の繰り返しによって立案する学習計画の精度が向上したのかを明らかにする。

（2）Toering et al.（2012）が作成した学習自己申告尺度（SRL-SRS）に基づいた質問紙調

査により生徒の自己調整スキルが向上したのかを明らかにする。

(3) 見通し精度と自己調整スキルの関係性を、相関分析によって明らかにする。

(4) 見通し精度が向上した生徒の記述分析により、見通し精度が向上した生徒がどのような見通し活動を行っているのかを明らかにする。

3. 研究の成果

(1) 見通し精度は授業回数を重ねるにつれ向上した。特に見通し精度は単元序盤に向上が顕著に見られたことから、序盤における課題内容の把握が大きく作用すると考えられる。

(2) 自己調整スキルは計画、自己モニタリング、評価、省察、努力、自己効力感のすべてのサブスケールで有意に向上した。この結果から、見通し活動に重点を置いた指導により、自己調整サイクルが機能したと考えられる。

(3) 生徒の見通し精度（向上群、変化なし群、減少群）と自己調整スキルの事前・事後の変化量は図1のようになった。スピアマンの順位相関係数を用いて分析した結果、生徒の見通し精度と自己調整スキルの変化量間には有意な正の相関 ($r = .308, p < .001$) が認められた。結果から、見通し精度が高い生徒ほど、自己調整スキルも高い傾向が明らかになった。

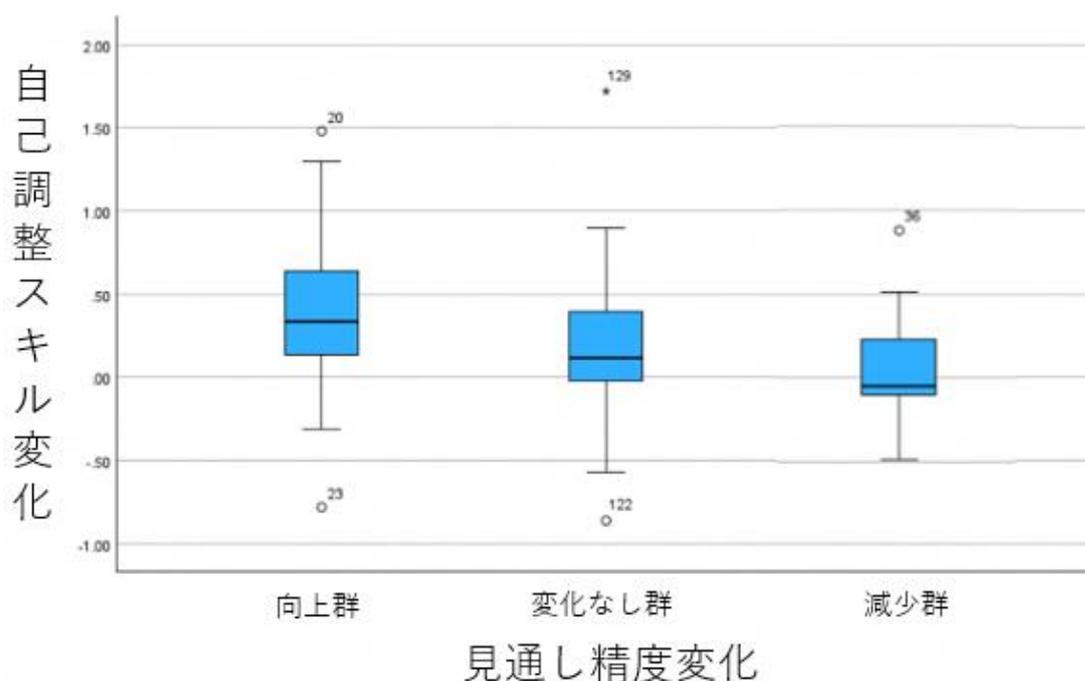


図1 見通し精度と自己調整スキル変化量の関係

(4) 見通し精度向上群の生徒は個別学習を指向する傾向が強く、具体的な学習内容を決定する傾向がやや弱いことがわかった。また、学習序盤に課題内容の全体像をつかむ傾向があることがわかった。

4. まとめと課題

複線型授業の文脈において、生徒の見通し活動の精度を向上させることを通して、自己調整スキルの向上につなげる指導の有効性を示した。授業においては、あらかじめ学習の全体

内容が把握しやすい設計や、単元序盤における学習内容の全体把握を促す指導・助言が効果的と考えられる。

一方で、本研究の結果、見通し精度と自己調整スキルの相関関係は決して強くなかった。見通し精度の向上を通じた指導に限界がある可能性を示唆している。見通し活動に他の要因（学習内容、個人の特性など）がどのように影響するのか、さらなる検討が必要である。見通し活動のみでなく、実行・振り返りフェーズにおける指導の在り方も同時に模索していくべきである。見通し精度のより客観性の高い分析を行うことも必要である。

5. 主な参考文献 ※記載スペースの関係で一部のみ掲載

- 高橋純（2022）『1人1台端末を活用した高次な資質・能力の育成のための授業に関する検討』日本教育工学会研究報告集 2022年 2022 巻4号 p.82-89
- B. J. ジーマーマン、D. H. シャンク 編著塚野州一訳（2006）『自己調整学習の理論』北大路書房
- 木村明憲（2023）『自己調整学習 主体的な学習者を育む方法と実践』明治図書
- 伊藤美貴、大島崇行（2024）『見通し活動を授業に取り入れることで学習者はどう学ぶか—TPMシートを用いた学びの事例的研究—』臨床教科教育学会誌 2024 第23 巻第2号
- 木村明憲、黒上晴夫（2022）『自己調整スキルの育成を促すレギュレートフォームの効果』日本教育工学会論文誌 2022年 46 巻 Suppl. 号 p. 25-28